

レディオ体操

主催団体 / 障害福祉サービス事業所アルス・ノヴァ (NPO法人クリエイティブサポートレッツ)

【団体概要】

障がいや国籍、性差などさまざまな違いを乗り越えて、すべての人々が互いに分かち合い、共生できる寛容性のある社会づくりを行うことをミッションとして、2000年から活動を開始したNPO法人クリエイティブサポートレッツが、2010年に開設した障害福祉サービス事業所。施設利用者それぞれのやりたいことを軸とした福祉サービスを提供し、障がいのある人が“その人”らしく、社会と関わりを持って暮らすための福祉を実践している。

<http://arsnova22.exblog.jp/>

<http://cslets.net>

【事業概要】

「レディオ体操」は、施設の日常アクティビティとして行われるラジオ体操から見えてくる、障がいのある人たちの“そのまま”の魅力を伝えるため、2013年から取り組み始めた事業。日常的に行うのももちろんのこと、外部団体主催のイベントにも積極的に出張しながら、北村成美(ダンサー)、片岡祐介(音楽家)、マッスルNTT(音楽家)らと施設利用者、職員が共にステージをつくり上げた。



「たけし文化センター」というコンセプトで障がい者と一般の人々をつなげるクリエイティブな一連の試みを行い、福祉施設「アルス・ノヴァ」を運営するクリエイティブサポートレッツ（以下、レッツ）は、14年に渡る活動の中で、社会と福祉のあり方についての既存概念の揺さぶりを行ってきた。その根底には、レッツを主宰する久保田翠さん自身が重度の障がいを持つ子どもをもつ親であり、日常

を暮らしていくなかでの「こうあってほしい」という思いが横たわっている。レッツの活動は、障がいをもつ子どもと親を含むその周囲の環境を、少しずつでもよいから動かしていきたいという願いに突き動かされている。それは障がい者の存在をどう社会化してその存在を活かしていくかの模索であり、クリエイティブな手法を積極的に導入して、揺さぶりをかける。福祉という枠をはみだしているよ

うに見えるレッツの活動だが、はみだそうとしているからこそ、福祉・教育・子育てというジャンルと、文化・まちづくり・産業振興などといった他のジャンルとがつながることが可能なのだ。そこからは、既存の枠組みの中では見えなかったことが見えてくる。

2013年にレッツが行ったのは、誰もが知っているラジオ体操をツールにして、障がい者と社会のつながりをつくる試みだ。「そ

れぞれの個性を見極め、みんなでなにかをやるけれど個性が光ること、それぞれのおもしろい部分を際出たせられることはできないだろうかと模索していたときにラジオ体操に行き着いた」と久保田さんは言う。障がいがあるからこそ、型から個性がはみ出していくおもしろさを際立たせることができる。同時に日本人なら誰もが知っているので、どこでも誰とでも一緒にできるのが

魅力だ。そして、障がい者の「おでかけツール」にもなる。「施設にはユニークなものをつくる人もいるし、詩をかく人もいる。そういう人はいろいろなところにデビューしていけるのですが、一方、そういうメニューを持っていない人は、施設の外に出ていくツールがない。そういううちの何人かが、舞台というツールを持てるということが見えてきた」と久保田さんは言う。そし

てゆくゆくは、その人たちの“仕事”、つまり「社会的に役割を提供すること」、そして「それが対価を得ること」になればよいと考えている。彼ら自身は通常の就労はむずかしくとも、本人のやりがいになり、生きていくだけで蓄積できるなんらかの手段を持てる機会をつくるのが大切である。今年は一いつそういうバージョンをつくるのが目的だった。



あちこちに呼ばれて一緒にラジオ体操を行う「出張」を経て、2014年3月には音楽家の片岡祐介さん、振付家の北村成美さんとともに、「彼らが存在して初めて成り立つ舞台」を目指して、障がい者が普段の日課としてやっているラジオ体操を基に7つの演目をつくってお披露目をした。今回は通所者全員が舞台にあがった。

彼らのありのままを舞台上

げるために、レッツのスタッフは細心の注意を払ってきた。誰かを手本に型を教えて型にはめることにならないように、スタッフがまず真剣にやっているオーラを出し、それが彼らに伝播してステージに向かう気持ちが高まっていくようにした。「いつもやっていることを舞台でやるので、本人は変わらないでもいいんだけど、場の雰囲気は何かに向かってやっているらしいと思うことが

大切なんです。そう意識させること、そこが支援なんです」。スタッフにとっても自分たちで考え、アーティストの意見もきき、念入りに準備していったという教育的観点からも成果はあった。

しかし、念入りに準備してもなお、「障がい者が無理矢理合わせているように見えた」という意見もあった。一方、見たことのない舞台になっていたと評価してくれる人もいた。「いろいろな

立場の人が見ているので、次は誰に基準を合わせるのかによって舞台のつくり方を変えようと思います」。

「レディオ体操」から見えてきたことは多かったと久保田さんは言う。「いろいろな疑問も浮かんで、片付けていけないものがいっぱい見つかったので、やってよかったと思っています。私たちがやりたかった障がいのある人の存在を

そのままちに見せるという話、そこを問い直す話だから」。

障がい者をまちに開いていくということには困難もつきまとう。だからといって、彼らが施設の中で刺激もなく安泰にしていることが本当に幸せなことなのだろうか。障がいを持っていても、舞台を前に緊張したり、混乱したりしても、その経験が何人かにとってはよかったことになるのではと久保田さんは考えている。

同時に、障がい者とともに暮らす人々、障がい者に関わる人たちの気持ちを少しでも柔らかくしていくことも急務だ。レッツは設立当初からその人がその人のままでいられる場をつくろう、その存在そのものをおもしろがろうというスタンスでやってきた。「おもしろがる」とは共存してその人を認めて受け入れることだ。レッツで行っているアーティストとのユニークな活動やワーク



ショップは、ありのままの障がい者の存在を認めて“一緒におもしろがる”場づくりだ。「障がいをもつ人たちが幸せに輝いている瞬間を見て、あ、こういうこともありか、と思ってほしい」と久保田さんは言う。「だいぶ変わってきたけれども、障がいの子どもを持つおかあさんたちは、障がいの子どもを生んだということだけでなんとなく意識がマイナスなんですよ。私みたいにへんな人がいるということを知っ

てもらうのもいい。外と話すことで自己肯定にもつながる。おかあさんたちも、もっといろいろな体験をしてほしい。いろいろな価値観があるということを知ってもらったほうが自己肯定感につながると思う」。

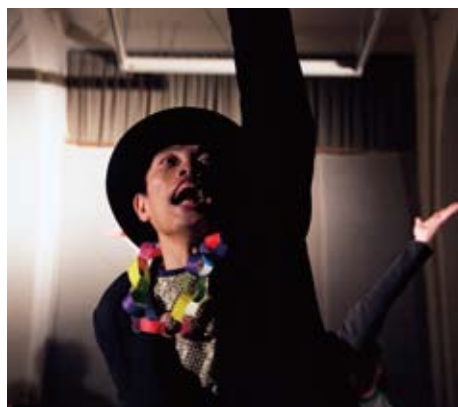
「レディオ体操」は、「ひとをまちに開く」ためのツールである。まちが障がい者とリンクできる場があり、まちが多様性を獲得する機会である。障がいをより大きな枠組み=まちの文化の

中で考えるきっかけを与えてくれる、社会にとってもひとつのツールとなりうる。「支援のやり方はもっと多様であっていい」と久保田さんは言う。たしかにその通りだ。ひとりひとりの気持ちを変えることは容易ではない。だが、「地味に丁寧にやるしかない」というレッツの姿勢は、確実に出会った人たちの心を少しずつ揺り動かし、同じような考え方の人々も少しずつ増やしている。(Sh)





参加アーティスト
片岡祐介 (音楽家)
北村成美 (ダンサー)
佐々木友輔 (映像作家)
マッスル NTT (音楽家)



photography ヨシタダイスケ